



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」（通巻 288 号）

**「教育者・新島襄」 -8-**

## **同志社大学設立の趣意書**

井上勝也同志社大学名誉教授



教育者新島襄を支える教育哲学は、その多くがニューイングランドで構築されたものと考えますが、明治 23 年を期して、明治 15 年から具体的に開始されました同志社大学設立の趣意書の中に、彼の哲学を読みとることができます。明治 15 年に書かれました「同志社大学設立之主意之骨案」をみますと、その冒頭で、維新以来の風潮を厳しく批判することから設立の目的を説き起こしています。彼は次のように申しております。

維新以来時勢之変遷ヲ説出シ来リ、従来之洋学ヲ採用シテヨリ、往々便宜ト智術ノミヲ主張シ、遂ニ只利ヲ是レ求ムルノ弊風ヲ惹起シ、学者輩中多クハ其ノ本ヲ探ラス其ノ末ニ趨リ、其ノ基ヲ固セス徒ニ速成ヲ期シ、甚シキニ至リテハ糊口ヲ以〔テ〕人間第一ノ急務トナシ、世ノ先導者ヲ以テ自任スル身分ナカラモ射利求名ヲ以テ学問ノ大目的トシ、安逸ヲ得ルコソ人間最大ノ幸福ナリト誤認シ……………（『新島襄全集』 I 教育編 P.24）

このように、彼は文明開化の弊害、とりわけ知育偏重と功利主義的風潮を批判し、次に大学設立の必要性を欧州諸国の例を挙げて次のように申します。

欧州諸国ハ夙ニ大学ヲ設ケ人才陶冶ニ意ヲ注キシハ他ナシ、一ハ以テ學術ノ奥蘊ヲ究メ、一ハ以テ人才ヲ養ヒ国力ヲ張ルニア〔リ〕シコトハ、教育ニ熱心ナリシ人物ノ語ニヨリテ之ヲ伺ヒ知ルヘキナリ、彼の歐洲ニ於テ宗教大革命ノ率先者タリシ独乙ノルーサ〔ルター〕氏云ヘルアリ、父兄ニシテ其ノ子弟ヲ就学セシメサルモノハ国賊ト云ヘキモノナリ、又同国ノ理学博士フィヒテ云ヘルアリ、我カ独乙聯邦ヲシ〔テ〕何ツカ他邦ニ卓越セシムルモノ必ラス教育ノカニヨルナルベシト（『新島襄全集』 I p.25）。

新島にとって要するに「教育ナルモノハ罪人ヲ減ジ良民ヲ増シ、国基ヲ固フシ、国力ヲ張ルニ欠クベカラザルモノ」（同上 p.27）でありました。しかしながらここで注意しなければならないのは、彼の目ざす国の基としての教育は当時の為政者が考えていたような国権優先ではなく、彼の考える教育は民権重視の立場に立っていたといえます。人民が学の蘊奥を究めることによって、広い視野と普遍的な価値尺度、高い道徳性をもち、困難にあっても判断を誤らず、勇気をもって実行し、他者を思い、国家を思う、このような人間をつくるのが究極的には国家を大切にすることにもつながり、近代国家の建設が可能になると主張するのであります。彼は次のように述べています。

大学ニ於テ天下ノ俊オヲ陶冶シ普ク學術ヲ修セシメ、古今ノ歴史ニ互ラシメ法学ノ根元ヲ究メシメ政事ノ沿革ニ通セシメ、又徳義ヲ尊ヒ然諾ヲ重ンジ、六尺ノ狐モ托スヘク百里ノ命モヨスヘク、大節ニ臨ムモ敢テ其ノ主義ヲ屈セス、事変ニ逢フモ決シテ其ノ所置ヲ誤ラス、深く同胞ノ幸福ヲ計リ遠ク邦家ノ安寧ヲ望ミ、国人ノ憂ヲ以テ己カ憂トナシ、国人ノ喜ヲ以テ己カ喜ト為シ、一身ヲ抛チ邦家ノ犠牲ト為スモ敢テ辞セス敢テ厭ワサルノ愛國丈夫ヲ養成セン事コソ我輩ノ切望シテ止マサル所ナリ（『新島襄全集』 I p.30）。

新島は、近代国家に必要なこのようなタイプの人間は国家権力の支配する大学では育成することかできない、と考えるのであります。なぜならば、彼がここで述べていますような

「深く同胞ノ幸福ヲ計リ」、「国人ノ憂ヲ以テ己カ憂トナ」すことのできる人間になるには、「神ヲ信ジ天命ニ随フ者」（「文明ノ基」『新島襄全集』 I p.346）

であって初めて可能であり、従ってキリスト教による道徳的人間の形成が「愛國丈夫」を養成する上で前提になるからであります。彼は欧米文明の根底にあって、それを支配するものはキリスト教とデモクラシーと全人教育であると考えていましたが、彼の考える教育によって目ざされる人間は、自由を尊び、他者の重荷を分かちもつことかできるキリスト教の道徳を身につけた主体的な人間であるということができましよう。彼はこのような人間の育成こそ、明治 23 年以降、立憲体制を維持し、発展させる上で肝要であると考えたのであります。彼は明治 21 年、全国に発表した「同志社大学設立の旨意」で次のように述べています。

苟も立憲政体を百年に維持せんと欲せば、決して区々たる法律制度の上にもみ依頼す可き者に非ず、其人民が立憲政体の下に生活し得る資格を養成せざる可らず、而して立憲政体を維持するハ、智識あり、品行あり、自から立ち、自から治むるの人民たらざれば能はず、果して然らば今日に於て、此の大学を設立するハ、実に国家百年の大計に非ざるなきを得んや。

新島は以上のように、近代国家に必要な人民とは、国家に盲従する臣民ではなく、自治自立の人民でなくてはならない。そしてそれがために、彼はまず学生の諸能力を円満に発達させることを心がけ、「科学、文学の智識を学習せしむるに止まらず」、それらの知識を善用する方法を学ばしむることを重視いたしました。アーモスト・カレッジのシーリー総長が申しましたように、新島は、学生が自分にあった考え方を自からの力で構築し、それが普遍性をもったものかどうかを常に確認させる。そして学んだ知識を正しい目的に用いるためには、新島の言葉を用いますならば「是等の知識を運用する品行と精神」を養成しなければならないというのであります。■